



# 卓 話

りますが、シテ方は物語の主役、又は主役のツレのみを演じ、ワキ方は物語のワキ役で主役はできません。しかしワキ役のスペシャリストです。

## 「能のはなし」

宝生流能楽師 當山 淳司氏

只今ご紹介にあずかりました能楽師 當山淳司です。本日は補助として地謡の金森先生にお願いしまして、二人で参りました。よろしくお願い致します。



私は能役者であり、研究者や評論家ではありませんので、「能」の説明というより、演者の立場から「能」をご紹介させていただきます。

### 『能について』

皆さんに「能って知っていますか」と尋ねると「歌舞伎でしょ」と答えられる方がいます。それほど知られていないのです。能は、今から600年程前、観阿弥、世阿弥の親子のよって大成された演劇です。「能」は、おおかえの能楽師を持っている身分の高い殿様しか観ることができませんでした。それを庶民にも観せましたが分からなかったのが、庶民に分かりやすく砕いて、庶民の楽しみのためにつくられたのが、「歌舞伎」であり、「日本舞踊」なのです。振りも派手です。歌舞伎の代表的なものに「連獅子」がありますが、髪を大きく振るなどは「能」でやれといわれても無理です。

また「歌舞伎」と「能」の大きな違いに、メイクをするかしないという点があります。歌舞伎は顔に線を引いたりメイクをしますが、能役者はメイクを一切いたしません。能はメイクではなく面（おもて）をつける事から、「仮面劇」ともいわれています。本日は、面（おもて）を持ってきていますので、後で面について説明いたします。

### 『番組の見方』

ではお手許の資料の2枚目に「能舞台」の紙があります。さらにその次に番組があります。これは、実際に今度うちの「當山能の会」で行う「綾鼓（あやつづみ）」の番組ですが、この案内を使って、「番組の見方」を説明いたします。

まず、題名が「綾鼓（あやつづみ）」と書いてあります。能は完全分業制です。「シテ 當山孝道、「ツレ 當山淳司」、「ワキ 森 常好」とあ

ワキの下に大鼓、小鼓、笛、太鼓とありますが、これらを「囃子方」といいます。「カン」と音の出る「大鼓」、「ポン」と音の出る「小鼓」、「ピー」という音を出す「笛」（横笛）、そして「太鼓」の四つを「四囃子」といいます。「四囃子」も分業制で、楽器の中でそれぞれ流派はありますが、「大鼓方」は「大鼓」、「小鼓方」は「小鼓」しかやりません。左側に「地謡」とありますが「じうたい」といい、通常8名ですのですが、本日は金森先生お一人でいたします。今でいうバックコーラスにあたるものです。その上の「後見」はこの舞台の「後見人」のことで、「シテ方」のみがおこない、この「能」の全てを把握している者にしかできません。舞台中に「シテ方」や「ツレ方」が倒れたりしたときに、すぐに代役として代われる人です。

「間」とありますのは、「あい」と読みます。

「間狂言」のことで、「狂言方」のみが行ないます。「能楽」は一般的に前後、二部構成になっています。前半、おじいさんで出てきた「シテ」が後半、武者になってでてきます。一部おわって、「橋掛り（はしがかり）」に引いて、衣装を変えるのですが、舞台はそのまま残っているので、能と能の間を、狂言で間をもってもらう、今で言うコマーシャルのようなものでした。という「狂言方」に叱られるかもしれませんが、狂言は喜劇ですので若い人には合っており、野村万歳さんたちの活躍で狂言独自の舞台をやるようにもなりました。今、私たちも「能」を若い人たちにもっと観てもらえるようにするにはどのようにしたら良いのか、試行錯誤しています。

### 『面の説明』

さて、僕等は「面」を大切にします。能楽の話の中には、実に様々な役柄が出てきます。武将、男、女、老男、老女、さらに天狗、鬼、神、化け物といった人間ではない架空のものも出てきます。中には直面（ひためん）といって面をかけない役もありますが、それ以外は全ての役が面（おもて）をかけます。

（「面」を見せながら説明）これは、「小面（こおもて）」といい、女性に使われます。つぎのこれ

は「じょう」といい、おじいさんにつかわれます。馬の尻尾でできている髭がついています。さいごに「平田（へいら）」といい、若い武将に使われます。例えば「源義経」や「平清盛」です。

今、金森先生に実際に、「面」をつけていただいています。これは、「つね」といい、正面を向きますが、演者が悲しい表情をするときには、「くもる」と言って下をむけば、悲しい表情に見えますし、反対に嬉しいときは、「てる」と言って上向けば、表情が明るく見えます。上を向きすぎると「照りすぎ」で馬鹿っぽくみえますが、それほど「面」は表情をだせるのです。泣いていることを表現するときは、「くもる」をしてから「しおる」といって、「左手」を顔の前にもっていきます。このように面は見る角度によって、喜怒哀楽を表現する事ができます。現代語で「能面のような顔」という言葉があります。これは「無表情」などを表現する意味で使われていますが、「能面」は見る角度によって、全く違う表情に見えるように計算されて作られたもので、様々な表情が読み取れる完成されたものです。

#### 『八島・葵上の説明』

最後に本日演じる「葵上」「八島」の説明をいたします。

「葵上」は「源氏物語の葵の巻」から取り上げられた話で、主人公は光源氏の「前妻」にあたる「六条の御寝所」です。「六条の御寝所」が「後妻」である「葵上」を憎むあまり呪い殺そうとし、最終的には般若になってしまうという女の憎悪の話です。

じつは題が「葵上」なのですが、「葵上」は出てきません。舞台に「葵上」に見立てた着物（小袖）が置いてあるだけで、病床に臥している「葵上」を「うわなりうち」するという話です。

実際は装束を着て、「面」をつけてやるのですが、今日はこのままやらせていただきますが、装束を着ているように見ればうれしいです。

つぎの「八島」は、武将の話です。源義経が主人公で、香川県にある矢島で、平家が壇ノ浦で滅びるという話しです。ある僧が壇ノ浦に行くと老人に会います。ここの説明をして欲しいというと、老人が源平合戦の有様を余りに詳しくはなすので、尋ねたら、「私は源義経の亡霊である」といいます。そして後半では武将姿の源義経が、源平合戦の戦いの有様を舞うという話です。

#### 『実演』

では、本日は実際に「能」を御覧いただきたいとおもいます。

能は「扇」を使いますが、「八島」は剣と盾の2本使っています。また、謡には「ツヨ吟」と「ヨワ吟」があり、おおまかに言うと、ツヨ吟は一本調子な謡で、ヨワ吟はメロディーの高低差があります。今回実演いたします「八島」はツヨ吟の部分で、「葵上」はヨワ吟の部分ですので、「男」と「女」の違い（ツヨ吟とヨワ吟の違い）を意識してご覧いただければと思います、「八島」と「葵上」を、選んできました。

「はこび」歩き方の違いなども意識してご覧いただけたら面白味があると思います。